

口頭発表「動物飼育で育つ子供の資質・能力」

鷲見 辰美



1

これまでの教室内動物飼育の様子

教室での動物飼育を15年以上続けてきた。その中で感じたことを紹介したいと思う。これまでの教室内動物飼育の詳細は次のようになる。

2001~2003 ウサギ 2羽, ウズラ 2羽

2004~2006 モルモット 4匹

2005~2007 モルモット 4匹

(引継ぎ1匹 新規3匹)

2008~2010 モルモット 1匹

2011~2013 モルモット 2匹

2014~2016 ハムスター 1匹モルモット 2匹

このように飼育する匹数を変えてきたのは、子供にとって、小動物にとってよりよい環境を探るためである。それぞれ一長一短があるが、教室内飼育の場合は2匹が適切ではないかと考えている。

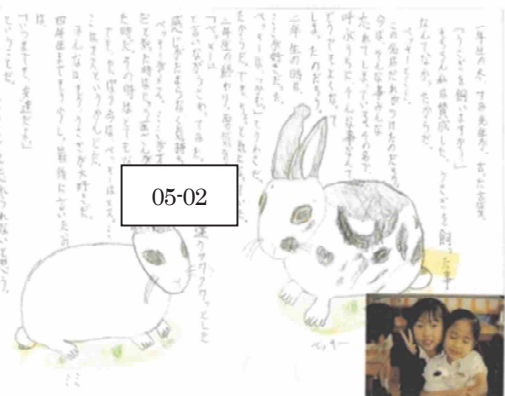
2 これまでの動物飼育で見えてきた効果

子どもは、一つの活動というより、様々な環境、活動から多様な影響を受けて成長する。動物飼育だけがその子の発達に影響したとは言えることはないが、一つの要因となったと考えることはできる。次の作文は、1年生から3年生までウサギの飼育をした子供が、5年生の時に書いた作文である。そこから、子供の成長を見てみたい。

☆ある5年生の女の子の想い(2001からウサギを飼育したクラス) ~文集より~

5年生の6月16日にミミが天国へ旅立った。ミミとは1年のときからの付き合いで、今は預かりたい子だけで、大切に育てていた。それなのに相棒のペッキーより先に天国へ行ってしまった……

「わあかわいい!」、1年生の時に、最初にミミとペッキーを見たときに思ったことだ。休み時間に



はウサギをダンボールの穴からのぞいたりした。2年生になると慣れてきてだっこをして遊んでいた。3年生では、「ミミおいで!」と言うとついてきた。その姿がかわいかった。私はずっと一緒にいたかった。

そして、4年生、クラス替えでみんなが別々になるので、クラスで相談をした。「1ヶ月交代で預かるのは?」「いや、誰か一人が飼うのは?」「どうしようか」とみんな悩んだ。教室で私たちが円になって話していると2羽のウサギが私のほうを見て、「ぼく



たちどうなるの？」と問いかけたかのように見えた。それから何十分も話し合っただけで1ヶ月交代でウサギを預かることになった。預かる子全員が「早く来ないかな」と待ち続けた。しかし、それは1年半という短い間で終わってしまった。

6月16日の朝、私がミミに「おはよう」というと、いつもはかごをガタガタさせるのに音がしない。よく見ると体がブルブルしていて今にも死にそうだった。「大丈夫」と叫んだ。私は学校に行くまで背中をなでていた。出かける時間になると私は後ろを振り返りながらミミを何度も振り返った。私はミミと会うのが最後のような気がしたから。

私は、ミミを6月に絶対に預かりたかった。私の誕生月だからだ。ミミはちゃんと私と一緒にいられた。だからよけいに悲しかった。

でも、半年後の今はなつかしい気持ちに変わっている。ミミとの楽しい日々を私はミミのお墓の前で思い出していた。

低学年から育てていきたい資質能力の一つとして、「相手の気持ちを考えることができる」ということが考えられる。それが、愛情、思いやり、やさしさの根底にあり、しいては、想像力、コミュニケーション力を育てることにもなる。

この「相手の気持ちを考える」ための活動として、動物飼育は中心的な役割を果たす。クラスの間がこの気持ちを育てなければ、動物飼育はトラブルに直結することになる。当然、低学年は自己中心的な考えをしがちな発達段階になるので、トラブルの連続になる。そのトラブルを解決していく中で、相手の気持ちを考えることの大切さに気付いていけるようにしたい。



3 「相手の気持ちを考える」資質能力の成長が見られる場面

日々の世話そのものが、育成する場面であるが、特に次の場面が考えられる。

(1) 2年生が1年生に抱き方を教える

2年生から1年生にモルモットの抱き方や世話の仕方を教える。モルモットを怖がる1年生もいる中で、その恐怖心をどのように取り除けばよいのか試行錯誤することになる。常に1年生の表情、動作を見ながら対応を考えなければならない。えさやりから入ったり、プールで使ったタオルを活用したり、子供たちなりに工夫する様子が見られることになる。

(2) 掃除当番を忘れる

日々の掃除は欠かせないが、子供たちにとって最初の関門になる。しばらく飼育するうちに、慣れてくるし、逆に糞をしていることで安心するようになるが、最初は抵抗が大きい。掃除やえさやりを忘れてしまったり、いいかげんになったりすることで、周りから責められ、トラブルになる。忘れてしまった子を責めるだけでいいのか、自分も何かをうっかり忘れてしまったことがないかを考え、これからの対策をどのようにすればよいか、みんなでアイデアを出し合い話し合いをする。

(3) クラスが別々になるときの話し合い

4月になれば、別のクラスになることが多い。クラスが変わってしまう時の対応をどうするか考えることになる。学校の飼育小屋に入れたり、下のクラスに引き継いだりするのは一見よさそうに見えるが、自分たちの責任を放棄することでもある。暖かい部屋になれたウサギが、飼育小屋では寒すぎたり、寂しすぎたりするというウサギの立場になって考え、どのような対応がよいのか話し合いをすることになる。様々な言い分、価値観がぶつかる中で、答えを見つけ出さなければならない。責任をもって飼育できる子がシェアしながら引き取る形で落ち着くことが多い。

(4) 死に直面するとき

飼育を始めるにあたって一番心配されることが死んでしまうことである。科学的ではないが、一番世話をしてくれる安心する子の家で亡くなることが多いんだよという話をして安心してもらう対応をする。それでも死はやがてやってくる。限りある命を実感することは、生き物すべてに命があることを再認識し、命を尊ぶ気持ちを育てることになる。

(筑波大学附属小学校)